「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

https://www.jrc.or.jp

February 2023 NO.993

2

令和5年 2月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第993号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

わたしも赤十字 寄付の協力者 田中初枝(たなかはつえ)さん P.4でご紹介

特集

ウクライナ人道危機から1年

～国際赤十字と日赤の支援～

赤十字の最新情報をSNSでチェック!

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL：03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

令和5年2月1日（毎月1日発行） 第993号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

ウクライナ人道危機から1年

～国際赤十字と日赤の支援～

© ウクライナ赤十字社

首都キーウなどミサイル攻撃を受けた地域の支援のため、ウクライナ赤十字社の緊急対応チームは24時間体制で活動している

最新レポート 国際赤十字の動きとウクライナの今

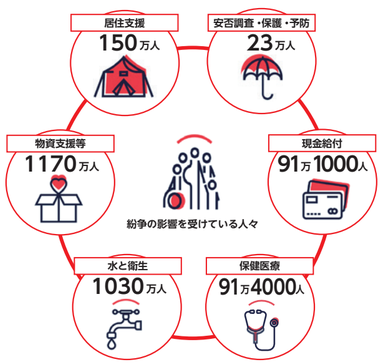
2022年２月24日に始まったロシア・ウクライナ国際的武力紛争激化から１年が経過しますが、いまだに終わりが見えません。12月18日、赤十字国際委員会（ICRC）が支援する病院が攻撃を受け、患者２人が亡くなるほか、ヘルソンではウクライナ赤十字社の緊急対応チームのボランティアが砲撃に巻き込まれ、１人が命を落としました。国際人道法によって、民間人、そして医療機関や医療スタッフ、人道支援に携わる人は、尊重され保護されなければならないと決まっています。人道支援が妨げられないようにすることを、ICRCは紛争当事者に対して強く要請しました。

12月時点でウクライナの国内避難民は約600万人と推計され（IMO統計）、国外への避難民は800万人余りに上ります（UNHCR）。現在、国際赤十字の支援のもと、ウクライナ赤十字社を中心に厳冬期対策支援が実施されており、特にエネルギー施設への攻撃により電力が不足する中、発電機や冬布団、寝袋、電気ヒーター、薪ストーブなどを配布しています。日本赤十字社も厳冬期対策支援に４億2000万円を拠出しました。昨年12月末までに日赤に寄せられた「ウクライナ人道危機救援金」は79億3507万円に上りました。それをもとにICRCと国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）それぞれに25億1000万円を送金。残り約29億円は日赤とウクライナ赤十字社の二国間支援事業（厳冬期対策支援含む）などに活用されます。

© リトアニア赤十字社

リトアニア赤十字社は電力不足に陥っているウクライナのリヴィウ州に発電機200台と寝袋4000個を支援しました。写真はリトアニア赤十字社が配布する物資を受け取った避難者の様子

国際赤十字・赤新月社運動による支援実績
（ウクライナおよび周辺７カ国、2022年2月～10月）



赤十字ボランティアが人道危機対応に従事
9万6000人以上

© ウクライナ赤十字社

ウクライナ南部のミコライウで5000台のストーブを準備する赤十字スタッフ

赤十字の実施する厳冬期対策支援について詳しくは▶

ウクライナと周辺国への日赤の支援

日赤が派遣した国と職員	
ウクライナ	医師、薬剤師、放射線技師、理学療法士、調整員
モルドバ	救援物資のロジスティクス要員
ポーランド	臨床心理士（こころのケア）、調整員
ハンガリー 他	調整員

日赤はウクライナ人道危機に対して資金援助だけでなく、ウクライナおよび周辺国へ日赤職員を派遣するなど人的支援も実施しました。周辺国では救援物資の管理や調整、避難民のこころのケアの支援体制づくりなどに貢献。ウクライナではICRCやIFRCのほか、日赤を含む13の姉妹社がウクライナ赤十字社を個別に支援しています。

日赤は❶リヴィウ州にあるリハビリテーションセンターの改修・運営支援、❷同州の診療所や訪問看護といった各サービスの拠点となるウクライナ赤十字社サービスセンターの建設と運営を支援、❸イヴァノ＝フランキウスク州での巡回診療支援、❹救急車支援、❺厳冬期対策支援、❻現金給付支援、❼緊急対応基金支援の７つのプログラムをウクライナ赤十字社と行うことで合意。長引く人道危機への中長期的な支援が求められています。

ウクライナ全国

緊急救援や巡回診療の救急車を10台提供

救急車10台（緊急救援用５台＋巡回診療用５台）の支援。ウクライナ国内での調達が困難であることから、日赤が国際赤十字を通じて調達および資金を援助している

キーウ 他

日赤の支援でストーブや大型発電機を提供

昨年10月以降、発電所への度重なる攻撃のため、多くの地域で電力不足に。現在、全国各地に発電機やストーブを配布中。ウクライナ赤十字社の本社も電力が停止する中、日赤の資金支援による大型発電機が到着し、大変喜ばれた

check!

赤十字マークには大切な意味があります

赤十字マークは戦争や紛争などで傷ついた人々とその人たちを救護する軍の衛生部隊や赤十字の救護員・施設等を攻撃から守るために識別するマークです。したがって紛争地域などでこの「赤十字マーク」を掲げている病院や救護員などには絶対に攻撃を加えてはなりません。これはジュネーブ諸条約によって厳格に定められています。赤十字マークに対する誤った理解が広がらぬよう、紛争地域以外での赤十字マークの使用には厳格なルールが定められています。国内で赤十字マークを使用できるのは赤十字社と自衛隊の衛生部隊など、政府から許可された組織・団体のみ。一般の病院や商品での使用は法律で禁止されています。

© ICRC

避難者を乗せた車の列を先導するICRCの車両にも、前後左右と上空からも分かるように赤十字マークが付けられている

令和5年2月1日（毎月1日発行） 第993号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

TOPICS

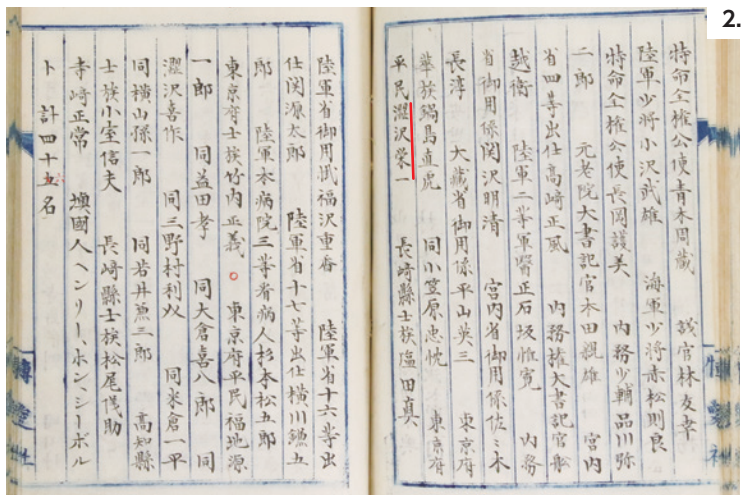
企画展　佐野常民生誕200年

日本赤十字社を創った男の素顔　3月30日まで

1.

鈴木長吉《佐野常民像》上野の森美術館蔵

2.



1.「佐野常民像」鈴木長吉作（上野の森美術館蔵）
明治から大正時代に活躍した金工家で、常民と親交のあった鈴木長吉（1848-1919）によるブロンズ像を特別公開

2. 博愛社報告原稿（簿冊）
支援者への活動報告をまとめたもので、1880（明治13）年の社員名簿には、渋沢栄一や大隈重信、伊藤博文らの名前も（画像は渋沢栄一の掲載頁）

昨年10月から日赤本社内にある赤十字情報プラザで開催中の創設者佐野常民生誕200年を記念した展示の会期終了が迫ってきました。

ふだんは見ることができない常民ゆかりの品々が一堂に会しています。常民直筆の博愛社（日赤の前身）設立請願書や当時の社員（現在の会員）一覧、日清戦争の反省からもっと人を救いたいという常民の執念によってつくられた病院船博愛丸の模型、若き常民が学んだ適塾の入塾者名簿（複製・適塾記念センター蔵）などです。

特に上野の森美術館から特別にお借りした佐野常民像は、本人をよく知る重要文化財作家の鈴木長吉の手によるもので、常民の優しい人柄、国の重責を担う責任感の強さ、命と向きあってきた苦悩や厳しさなどの精神性も表現され、見る者を圧倒します。

生涯をかけて人の命を救う仕組みづくりに奔走した常民の姿を映した芸術作品を日赤本社で見ることができるのは、今だけです。ご予約をお待ちしております。

赤十字情報プラザ企画展

佐野常民生誕200年
～日本赤十字社を創った男の素顔～

開催期間：～3月30日（木）※見学無料
場　　所：日本赤十字社本社1階　赤十字情報プラザ（東京都港区芝大門 1 丁目 1-3）
開 館 日：火・水・木　10:00～16:30（12:30～13:30閉室）※祝日除く

※ 事前予約制です。ご予約は03-3437-7580まで

赤十字 WEB ミュージアム
特別企画「佐野常民生誕200年」公開中
https://www.jrc.or.jp/webmuseum/column/

わたしも赤十字　今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

寄付の協力者
田中初枝（たなかはつえ）さん
千葉県市川市／72歳／不動産管理業

困っている人を救いたい
赤十字の理念に
看護学生時代から共感

私が初めて赤十字の存在を知ったのは看護学生のとき。看護師だった親戚の話を聞くうちに憧れて、職業婦人になりたいと思い、看護師養成の学校に入学。学生時代には寄付はできませんでしたが、誰かのために役立てればと、献血をしていました。卒業後、病院で初めて担当したのがICU（集中治療室）。意識のない方や重体の患者さんがほとんどで、生と死を毎日のように目の当たりにし、日々、目の前の命を私たちの手で救わなければという使命感でいっぱいでした。

1986年ごろ、夫と二人で不動産管理業を始め、今年で37年目になります。起業した後にバブル崩壊などもあり、私にとっては畑違いの仕事で大変な思いをしながら、二人三脚でやってきました。夫婦共に働き詰めで、息子たちには寂しい思いをさせたかと思います。

主人は18年前に急死し、私が会社を継ぐことになりました。医療とは関係のない仕事ですが、救いたいという気持ちはずっと変わらず心の中にあり、会社を継いでから赤十字に寄付しています。

寄付を続けていたら、今年は金色有功章をいただきました。残念ながら千葉県赤十字大会の表彰式は中止となりましたが、大事なものをいただき、身の引き締まる思いです。ここまで頑張ってこられたのは周りの方々のおかげ。今度は私が、困っている人、本当に助けが必要な人のために、寄付という形で恩返しをしたい。これからも、できるだけ寄付を続けていきたいと思っています。

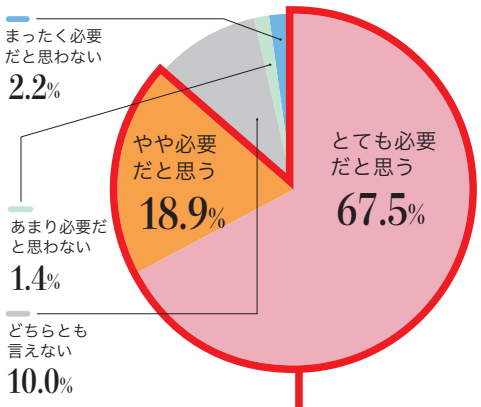
寄付するあなたも赤十字です

- ■クレジットカードで寄付
- ■郵便局・銀行の口座振替
- ■郵便局・銀行の窓口
- ■お近くの日本赤十字社窓口

TOPICS

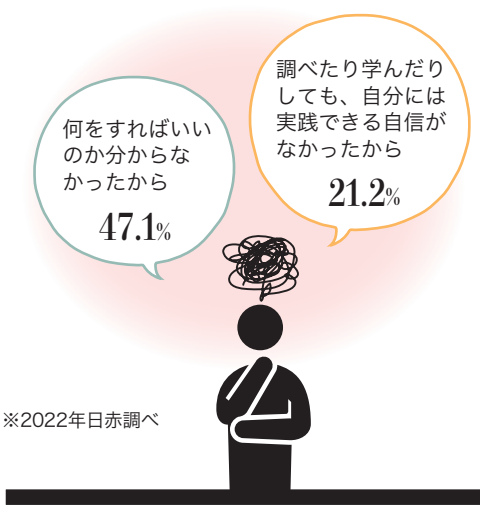
もしも呼吸が、心臓が止まってしまったら
心臓マッサージやAED…とっさの救助、できますか？

一次救命処置「必要」と考える人が８割に！
調査対象：全国1200人の男女



このうち、「特に何もしていない」と答えた人は **54.1**% にものぼりました

必要性を感じながらも具体的な行動に移せなかった理由



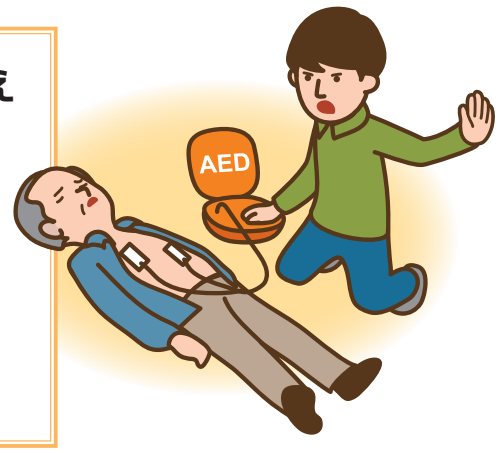
※2022年日赤調べ

もしものときに命を救うための、３つの心構え

①心臓マッサージなどの一次救命処置が必要な場面には「いつ遭遇するか分からない」ことを心に留めておく

②救急法の講習は１回のみの体験や受講だけでなく、定期的に反復受講や練習をして身につける

③ほんの少しの勇気をもって行動に移す



韓国の繁華街で大勢の死者を出した転倒事故など、昨年は痛ましい事件・事故が国内外で相次ぎました。思いがけず訪れる緊急事態に、心臓マッサージや人工呼吸、AED の使用などが適切に行えれば人命救助につながります。日本赤十字社は昨年12月、10～60代の男女1200人を対象に、一次救命処置に関する意識調査を行いました。左図の通り、８割を超える回答者が、呼吸や心臓が止まった人に対しての心肺蘇生などの一次救命処置を「必要」だと認識していますが、実践できない・どちらとも言えないと回答した人はその半数を上回る残念な結果となりました。実践できないと感じる要因については「とっさにやり方を思い出せない（人工呼吸 40.5%、AED 56.1%）」、「自分が対処した相手が死亡したり状態が悪化すると怖いから（心臓マッサージ 53.0%）」といった理由が挙げられました。

日赤では全国の支部で一次救命処置を学べる赤十字救急法の講習を開催しています。日赤本社の救護・福祉部健康安全課 武久伸輔（たけひさしんすけ）課長は次のように話します。「一次救命処置は難しい技術などは必要なく、一般市民でも十分実践できます。青少年赤十字の小学生にも講習を行っていますし、実際に子どもが大人の命を救った事例もあります。緊急事態に適切に対応できる人が増えることで、誰かの大切な命を救うだけでなく、万が一あなたが倒れたときに誰かが助けてくれるかもしれない。想像してみてください。大切な人が、目の前で突然倒れたら…。大切な命を救うために、一次救命処置を学んでいただくことを推奨します」

日赤では全国の支部で赤十字救急法などの講習を実施しています。

お近くの支部へおたずねください
講習の内容について詳しくはこちら
（心肺蘇生法を学べる動画もあります）▶

献血まるわかり辞典

「なるほど！」と思わずヒザを打つ“献血にまつわる豆知識”を紹介。第11回は、会社内で献血ができる「オープン献血」をご紹介！

vol.11

オープン・けんけつ

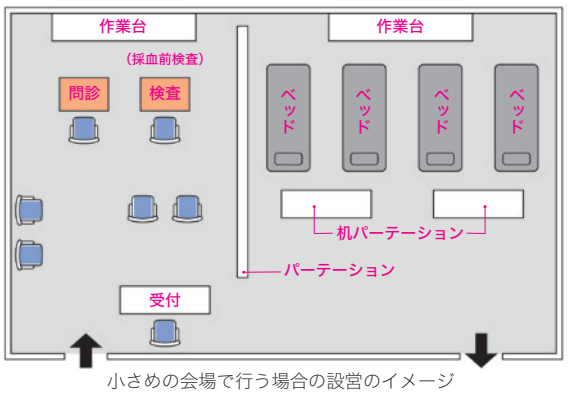
【オープン献血】

会社の会議室が…献血ルームに変身！

日赤では、献血ルームや献血バスのほか、協力企業の会議室などで採血を行う「オープン献血」というスタイルでも献血を実施しています。

オープン献血は、いわば献血ルームを一時的に会議室で再現するようなもの。会場には採血に必要な医療用資機材の設置だけでなく、医師・看護師・事務スタッフが派遣されます。

会議室での設営の一例を紹介すると、まず採血ベッド４台（最小セット）を設置（イラスト参照）。その近くに医師による問診、看護師による採血前検査のスペースを配置し、受付と待機席を用意。採血ベッドの間には看護師の席も用意します。これらの設営内容はあらかじめ企業の担当者にも確認してもらい、安全性を理解・納得していただいた上で献血を開始します。オープン献血は、会議室の限られた空間で【問診→採血→休憩】を完結させるため、同時刻に大勢が集まらないように事前の告知や誘導、予約の徹底といった一連の手続きも、その企業にご協力いただいています。



小さめの会場で行う場合の設営のイメージ
（※会場によって設営内容・位置は異なる可能性があります）

オープン献血での採血の様子。毛布やタオルなどの備品も全て持ち込む

コロナ禍で企業や学校の献血協力が得にくい中、大変な時だからこそ協力したいとオープン献血を実施してくださる企業もありました。換気や消毒を徹底して安心安全に整えた会議室は、世界に１つだけの特別な献血ルームになります。

令和5年2月1日（毎月1日発行） 第993号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

全国各地
あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は
行われています。

秋田県 神奈川県 香川県 誰も取り残さない。紛争からも飢餓からも。全国各地で実施「NHK海外たすけあい」募金

紛争や自然災害、食料危機、感染症のまん延などで苦しむ世界の人々への支援を呼びかける「NHK海外たすけあい」の募金活動が全国各地で実施されました。

日赤神奈川県支部は、12月9日～12日、「ウクライナ人道危機写真展」を開催し、延べ430人が来場。現地の写真を通じて赤十字の活動や寄付への感謝を伝えるとともに、紛争の陰で深刻化するアフリカの食料危機にも焦点を当て、関心の差が支援の差とならないよう、広い視野での支援を呼び掛けました。

香川県支部では12月10日、青少年赤十字(JRC)加盟校4校の児童・生徒や高松市赤十字奉仕団、青年赤十字奉仕団や地元企業など総勢90人が、高松駅と2カ所の商店街で街頭募金を呼び掛けました。

秋田市赤十字奉仕団は12月11日にJRC高校生メンバーと、17日には協力企業の職員やプロサッカーチームのマスコットと共に街頭募金を実施。コロナ禍で大きな発声は自粛しつつ元気に活動しました。

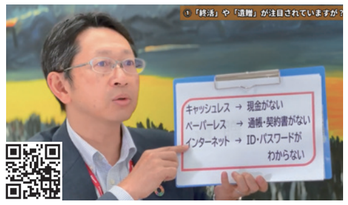
幼い子も募金に協力（秋田駅前ぽぽろーど）

「アフリカの危機は知らなかった」の声も

募金に協力いただくと、温かい気持ちに

秋田県 お金に関する「終活」「遺贈寄付」を動画で紹介

日赤秋田県支部では、“自分にもしものことがあった場合の財産の使い道”について考える機会にしてもらおうと、「終活」と「遺贈寄付」についての動画を制作。秋田銀行の担当者に話を聞き、子どもや孫のために残したはずの財産が所在不明になった事例などを挙げながら、資産の管理、人生最後の社会貢献として「遺贈寄付」の手続き方法などについて、分かりやすくまとめました。



お金の管理の仕方も変化し、遺族が遺産を把握できない場合も

京都府 命を守る救急法を習得 10人の新人指導員が誕生

11月26日、日赤京都府支部で赤十字救急法指導員の養成講習会が行われ、新たに10人が指導員となりました。参加者らは延べ8日間をかけて、より高度な知識と技術を習得。模擬指導実習やリーダーシップとフォロワーシップを学び、指導員検定に見事合格。指導した松田講師は「1人でも多くの人に救急法を伝えてくれることを期待します」とエールを送りました。

最終日は恒例の全身包帯に挑戦し、10分3秒の好タイムを記録

千葉県 がん治療の副作用による脱毛「ケア帽子」で心もケア

木更津市赤十字奉仕団をはじめとするボランティアの作った「ケア帽子」が君津中央病院に寄贈され、12月14日に贈呈式が行われました。ケア帽子は、抗がん剤の副作用で脱毛した患者が使用する肌触りの優しいタオル素材の帽子。贈呈式に参加した奉仕団員は「同じ物を何個も作り続けるのは大変だが、患者さんの話を聞き、やる気につながった」と力強く話しました。

５年以上続く帽子作りの輪は奉仕団を超えて広がり、仲間も増えた

赤十字はじめて物語 vol.11 広報活動

日本赤十字社の事業 その出発点にはそれぞれの「はじまり」のストーリーがありました。

白黒写真さえ珍しい時代に、赤十字活動をカラー投影で紹介

1877（明治10）年、日赤の前身である博愛社の設立とほぼ同時期に広報活動が始まりました。まず、この年に社則などをまとめた「博愛社創業広告書」を発行。さらに1891年12月から本紙「赤十字NEWS」につながる機関誌「日本赤十字（「博愛」に改題）」が発行されています。同年、後に第4代社長となる石黒忠悳（ただのり）が広報活動に役立てようと「赤十字幻灯」を考案し、本社に寄贈。全国各地で、赤十字のはじまりや日赤の活動を描いたスライドが投影されました。暗闇に明るく映し出されるカラーのスライドは新鮮な驚きをもって人々に受け止められ、新たな支援の輪を広げることになりました。赤十字の活動を全国に知らしめた幻灯が果たした役割は大きく、皇后（昭憲皇太后）と皇太子（大正天皇）に石黒夫妻が2時間余りかけて実演し、「誠に面白くかつ有益であるから、ますますこの幻灯をもって社業発展に尽くすように」とのお言葉を賜りました。さらに、中国やイギリスでも投影され、好評を博しました。娯楽の少ない明治時代、臨場感ある語りと光で描く物語は、赤十字思想の普及に貢献し、支援者獲得につながったのです。

日赤の各事業の「はじまり物語」はWEBサイトで ⇒

支援者獲得に貢献した「赤十字幻灯」

アンリー・デュナンや日赤の救護員が描かれたスライド30枚ほどと、投影するための幻灯機が石黒忠悳によって寄贈されました

岐阜県 車いすバスケ選手との交流でJRCメンバーが多様性を実感

12月12日、青少年赤十字（JRC）加盟校である郡上市立大和西小学校の5・6年生が、車いすバスケットボールチーム「GIFU SHINE」の選手と交流。池戸義隆選手、那須智彦選手による講演や車いすバスケ体験を通じ、パラスポーツへの理解を深めました。池戸選手は障害があることの苦労、人生を変えた恩師の言葉を紹介。真の意味で多様性を考える機会となりました。

青少年赤十字創設100周年事業の一環として実施

埼玉県 初詣でにぎわう神社で救護活動＆献血

日赤埼玉県支部は12月31日～1月3日、全国でも有数の参拝客が訪れる武蔵一宮氷川神社（さいたま市大宮区）からの要請を受け、毎年恒例となる臨時救護所を設置。体調不良やけが人の救護、迷子の対応を行いました。また、1月2日・3日には神社が献血バスを招致。献血をした方には福袋が贈呈され、2日間で409人と、新年早々から多くの方にご来場いただきました。

救護所では日赤の職員、看護師、赤十字ボランティアらが活動

常任理事会開催報告

令和４年12月23日、令和４年度第８回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会では、ウクライナ人道危機に対する日本赤十字社の対応について報告しました。

「赤十字NEWS」を スマートホン、PC でも！

https://www.jrc.or.jp/about/publication/news

大阪府 サンタクロースがやって来た！整肢学園のクリスマス会

12月22日、重度の知的障害や身体の動作が不自由な子どもが通所・入所する施設「大阪赤十字病院附属 大手前整肢学園」で通所のクリスマス会が開催され、親子32人が参加しました。感染防止に配慮して４グループに分かれてサンタクロースと対面。プレゼントを手渡しされると親子は自然と笑顔に。温かな雰囲気の中、サンタクロースとの楽しいひとときを過ごしました。

サンタクロースとの記念撮影ではその迫力にびっくりした子も

京都府 「原子力災害」に対応 日赤2府4県の合同研修会

12月8日・9日の2日間、京都市内で日赤の第4ブロック（滋賀県、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、京都府）の支部、病院、施設の職員を対象に、日赤原子力災害対応の基礎研修を実施しました。放射線環境下で救護活動を行うために必要なデジタル個人線量計の測定方法や防護服の着脱など、実際の原子力災害時に即した実践的な内容の実技や講義で学びを深めました。

この研修は、東日本大震災の原子力事故を教訓に平成27年から実施

宮崎県 宮崎県では９年ぶり！「九州八県赤十字大会」を開催

日赤九州八県支部が毎年持ち回りで開催している「九州八県赤十字大会」が、11月22日、宮崎県宮崎市のシーガイアコンベンションセンターで開催されました。同県での開催は9年ぶりで、九州・沖縄各県の関係者ら539人が参会。赤十字事業の推進に貢献した個人や団体、計198組に有功章や感謝状が贈呈され、宮崎県支部からは最多の106組が受章しました。

名誉副総裁寛仁親王妃信子殿下のお言葉を、鈴木俊彦副社長が代読

「赤十字を応援！」プレゼント パートナー企業紹介 vol.34 徳武産業株式会社

足元から人生を豊かに TOKUTAKE

社会貢献活動へとつながる、「寄り添う商品開発」

会社に隣接する用水路の掃除や隣接道路の清掃などを継続して行い、地域住民とのつながりを大切にしている

香川県さぬき市に本社を構える徳武産業は創業65年。今までもこれからも変わらずお客様の“声なき声”に耳を傾け１人でも多くの方の悩みを解決できるよう真剣に向き合うことを大切に、高齢者を対象にしたシューズを1995年から販売しています。看板商品でもある「あゆみシューズ」は、発売当初より「片方のみ」「左右サイズ違い」を販売し、好評を博しています。2001年からは個々の要望に沿った靴に調整する「パーツオーダーシステム」も展開。１人でも多くの方の悩みを解決できるよう制作に取り組んでいます。そのかいあって、昨年７月には累計販売足数2000万足を達成し、介護シューズシェアで日本一となっています。

創業当時から「商品とサービスを通して社会に貢献する」という経営理念のもと、優しい、寄り添いの社会の実現に向け、さまざまな地域貢献活動を実施。地域清掃などのボランティア活動、定期的な倉庫市、ワークショップの開催などを通して活気ある地域づくりに寄与しています。社員間のバレンタインデー・ホワイトデー費用を日赤へ寄付するなど、幅広い社会貢献活動も続けています。

SUTTO FIT（スットフィット）

5名さまに

履き口が広く、足入れラクラクなのに、足にフィットして脱げにくいルームシューズ。ご希望の色とサイズでお申し込みください。
ラズベリー（M22.0～23.0cm／L23.5～24.5cm）、インディゴ（LL25.0～26.0cm／3L26.5～27.5cm）

商品写真はイメージです

【応募方法】 プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①希望の色・サイズ ②お名前 ③郵便番号・ご住所 ④電話番号 ⑤年齢 ⑥性別 ⑦赤十字NEWS入手場所 ⑧本紙を読んで理解が深まった赤十字の事業は？（災害救護、国際活動、病院、看護師教育、献血、講習、JRC、ボランティア、社会福祉など） ⑨２月号のご意見・ご感想

郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 2月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785 WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。
2月28日（火）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

令和5年2月1日（毎月1日発行） 第993号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

WORLD NEWS

バングラデシュ南部避難民問題

子どものための活動をする避難民ボランティア（詳細は２次元コードから）。キャンプ内のボランティアの移動に関する規制ができ、日赤の事業を手伝えなくなった人も多く、新しい人材の採用や教育も行われている

避難民を受け入れる ホストコミュニティーにも支援を

90万人以上の避難民を受け入れているバングラデシュ。日赤は、就労が禁止され生活の立て直しが困難な避難民だけでなく、避難民キャンプを抱える地域の住民にも支援を広げています。現地首席代表の清水宏子さんに聞きました。

日本赤十字社
バングラデシュ代表部
現地首席代表
清水宏子
（日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院）

巨大な避難民キャンプ 受け入れ地域に広がる葛藤

2017年８月にミャンマー南西部で起きた大規模暴力。隣国・バングラデシュに逃れてきた90万人以上もの人々は今なお避難生活を余儀なくされています。

日赤の支援は同年９月に始まり、５年が経過しました。現地首席代表の清水宏子看護師は、これまでの日赤の支援によって現地の人々が知識や技術を身につけ、コロナ禍を乗り越えることに貢献できたことを喜びながら、現在の状況をこう語ります。

「ミャンマー情勢が悪化し、避難民の間では故郷に帰る見通しが立たないことへの絶望感が強まっています。避難民はバングラデシュでの就労が禁じられており、畑を作ることもできません。キャンプから出ることも厳しく制限される中、闇業者の手を借りてボートで他国に脱出を試み、多くの人々が亡くなるという痛ましい事例も。一方で、キャンプ周辺の一般住民も複雑な思いを抱えています。避難民の流入によって、自然豊かで静かな環境が一変しました。そしてキャンプ内では医療の無料提供や物資の配布などがありますが、周辺の貧しい住民はその恩恵が受けられません。これらの格差を軽減するため、昨年９月から国際赤十字は、避難民キャンプの近くのホストコミュニティー３カ所で地域保健活動を実施、日赤が資金提供しています」

この事業では活動初期から、避難民のボランティア（有償）を採用してきましたが、避難民キャンプ周辺の住民の採用も始めました。現在、避難民と地域住民が協力し合って、キャンプでの赤十字活動に従事しています。

「避難民と住民の区別がつかないくらい仲良く活動しています。赤十字の７原則を熱心に学び、喜びと誇りを胸に笑顔で活動している彼らの姿に私たちも励まされています。誰かを支えているという実感が生きる希望につながっているようです」

資金難で撤退する支援団体 国際赤十字が最後の砦（とりで）

厳しい経済状況下でも多くの避難民を受け入れたバングラデシュは、洪水やサイクロンなどの自然災害が頻発する国でもあります。こうした土地柄からバングラデシュ赤新月社の災害対応能力は非常に高く、避難民が流入してからもこれまでの経験を大いに生かしてきたとのこと。

「バングラデシュ赤新月社が、常に苦慮しているのが資金面です。特にウクライナ人道危機が始まって以降、物価全般の上昇はその活動に多大な影響を及ぼしています。この１年間、避難民キャンプからは各国の支援団体が資金難のため続々と撤退しており、バングラデシュ赤新月社、そして国際赤十字は最後の砦と言っても過言ではありません」

災害の多いバングラデシュと日赤との関係は歴史が長く、人々に語り継がれているそう。

「現地の人々から『日本が好き』という声をよく聞くんです。日赤の支援を経験した人々はその思い出を語り、日本の人々がすぐ近くにいるような親しみを感じると語ります。日本の皆さんの支援は、温かさをもって確実に届いています。これからもバングラデシュ、そして避難民の人々を忘れないでいただきたいです」

日赤支援の診療所で避難民の患者の通訳をするボランティア（右端）と面談に参加する清水首席代表（右から２人目）

© Alyona Synenko/ICRC

supported by ICRC

赤十字、世界の「現場」から

赤十字国際委員会（ICRC）、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）、日赤の事業地で切り取られた１枚。知られざる世界の赤十字活動。

2022年４月５日、ウクライナのブチャ。暖房も水も電気も使えない住居に取り残されていた老夫婦の状況を確認するICRCチーム。壊滅的に破壊されたブチャには、お年寄りや病気の人などの「逃げられない人々」、どこにも行けない人々が、身を寄せ合い、なんとか生きながらえていた。

紛争が激化し、ウクライナ国内にある赤十字施設も攻撃を受ける中、国際赤十字とウクライナ赤十字社は、巡回診療や、水・食料・救援物資などの配布、人々が生きていくために必要なインフラの修復や、医療施設への医薬品・医療機器の提供など、さまざまな支援を続けています。